

東洋史研究

一九五〇年九月刊
一九五一年六月二十五日印刷
一九五一年七月一日發行（毎月一日一回發行）



第 3 4 卷 第 3 號

上代日本における乗馬の風習……………小 林 行 雄

奈良時代における浮浪について……………直 木 孝 次 郎

チュルク族の始祖傳説について……………岡 崎 精 郎

史 料 解 説

最古のルースカヤ・プラーヴダ……………河 村 盛 一

學 界 展 望

日本民俗學界の動向……………平 山 敏 治 郎

日本古代史研究の一動向……………東 晶

書評・著書論文目録・彙報・その他

史 學 研 究 會

京都大學文學部東洋史研究室
東洋史研究會

秋季大會豫告

暑さ益々酷しさを加えます折柄、會員の皆様には愈々御健勝のこと、拜察致しお慶び申上ます。

さて恒例の秋季大會に就きまして、本年は各學會會員の交流と親睦をはかりまして、京都大學史學科各研究室關係の學會と史學研究会とが合同共催致すことと相成り、左の様は大綱を豫定致して居ります。

十一月二日(金)午後一時より 於京都大學
史學研究会大會

- 一、總會 報告
- 一、公開講演會

演題 二十世紀に於る史學・地理學・考古學
の發展

講師 京都大學史學科各研究室代表者
十一月三日(土)文化の日午前九時より 於京都大學

研究發表(公開)

- 讀史會大會
- 東洋史談話會大會
- 西洋史讀書會大會
- 地理學談話會大會
- 考古學友の會

當時は臨時喫茶室を設ける豫定

十一月四日(日)

見學

就きまして、研究發表御希望の方は九月廿五日までに史學研究会へ題目並びに内容梗概を御通知下さいませれば、十一月三日各研究会大會の適當な部門で發表して頂くよう取計らい致します。但し發表時間は二十分以内、また發表御希望多數の際は都合により或は御遠慮をお願い致す場合もあるかと存じますので、豫め御諒承下さいませ様お願い申上ます。

なほ本豫告を以て研究發表の公募に代えることと致します。

一九五一年七月末

京都大學文學部内

- 讀史會
 - 東洋史談話會
 - 西洋史讀書會
 - 地理學談話會
 - 考古學友の會
 - 史學研究会
- 會員各位

れるトーテミズムと二元的組織」)、事實回鶻人の作になる
 密書「オグズ・ナメ」にオグズ可汗が牡牛の形に描かれて
 いる (Bang u. Raehnati, Die Legende von Oguz Dair-
 han, Sonderausgabe aus den Sitzungen sb. d. Preuß. Akad.
 d. d. Wil. phil.-hist. Klasse, 1932, XXX.) のと併せ考う
 べきであらう。

②キルギースの所傳によれば、Kirgis の名は Kirgiz (四十の義)
 と Kirz (女の義) の二語よりなる、それはキルギースの王女
 が侍女四十名と共に長途の旅より歸つた時、その部落は敵に
 破られて一族離散し、ただ一匹の赤犬が残つていたが、四十
 名の侍女はこれと交つて各々一子を産み、キルギース隆盛の
 基をなしたという。(H. Vambery; Das Türkenvolk, s.
 252.) 白鳥博士は本傳説を以てチュルク諸族の狼傳説と併
 せ考うべきものとし、狼生、犬生兩傳説の親縁性を指摘せら
 れている(「烏孫に就いての考」西域史研究上、五六—九頁)

③前掲「支那古姓とトーテミズム」(下)二五六頁。

④D'Ohsson; Histoire des Mongols, Tome I. note V.

p. 420 et suiv. 田中幸一郎博士譯補「ドリンモン蒙古史」岩

波文庫版上卷三二—三頁。元史卷一二二巴而木阿而忒的斤

チュルク族の始祖傳説について(岡崎)

傳にのす所は文面簡略となつてゐる。

⑤ Bernheim; Einleitung in die Geschichtswissenschaft.

坂口昂・小野鐵二兩氏共譯「歴史とは何ぞや」岩波文庫版一

四一頁

⑥同右一四—二頁

⑦唐末、キルギースの動向については前田直典氏が若干ふれら

れている(東洋洋學報三二卷一號、「十世紀時代の九族韃

韃」六六頁以下)。

⑧「傳説」六四頁

⑨「民間傳承論」二三三頁

學 會 予 告

十一月二日(金)

午後

史學研究会大會講演會

三日(土)

午前午後

讀史會他各研究室關係學會

夕方 晚餐會

——以上・於京都大學——

四日(日)

見學(史學研究会主催)

従つて、本質的には家内奴隸制的體制に立ちつづつ官僚的權力に轉化しなければならなかつたこと、しかもかゝる轉化は皇室に於ては有利であり且つその必要に迫られていたことを考慮すべきでなからうか。井上真貫氏

「部民の研究」「大和國家の軍事的基礎」(日本古代史の諸問題所收)は、制度史的な平板性を免れないとしても、この期間の皇室の官僚制の成長を描き出されている。最近の竹内理三氏の條里制の起源に關する研究「中世班園村落における古代的遺制」(史學雜誌第五十八卷三號)「條里制の起源」(日本歴史第二三號)は、皇室のこの期間の、「實力養成」についての示唆に富む見解といえよう。もとより、兩氏の研究には、猶お検討すべき多くの問題を含んでいても、上述の見地に立つとき、今後の研究の出發點を意味するものとして、その價值は高く評價されねばならない。

一方、豪族にあつては、かゝる轉化に困難な問題を含んでいた。彼等は古代家族的構造に立つ以上、その同族者の有力なるものを次に獨立せしめて行かねばならなかつた。し

かも、彼等を結合せしめる唯一の紐帶は、既に擬制化しその限り實質的に眞の結合たり得ない共同體的關係しかなかつたのではないか。それゆえに、彼等の權力は、更に強化さるべきにも拘らず、個別化し弱體化せざるを得ない。かゝる豪族達に残された途は、デスポットとしての實質を備えつつある皇室の官僚となるか、或は非常な危険を犯して自らデスポット化するより外はなかつた。物部氏、蘇我氏の没落は、かゝる必然性にもとづくものではなかつただらうか。又かゝる豪族の弱體性(それは農民の生長と彼等自身の古代家族的構造にもとづいて)こそが、皇室をしてデスポットへの途を歩ませたのでなからうか。

以上、先學の研究をあげつつも一面的な叙述に止まつたこと、實證的になすぐれた研究を殆んど取上げなかつたこと、行論中に全然具體的史實を挙げなかつたこと、等は、限られた紙數のためとはいへ批判を受けなければならぬだらう。併し私は現在の古代史研究にとつて最も必要なことは、正しい方法論に立

脚したより妥當な理論的認識を深めることに
あると信ずる。そして、かゝる基礎に立脚し
て常に史料への沈潜を通じて、それらの理論
は絶えず具體化されねばならない。このこと
こそ、古代史研究により豊かな科學性を附與
して行くための最善の途ではなからうか。

(一九五一・一・三五)

織田武雄理事渡米

本會理事(史林編輯主任)織田武雄氏は昭和二十六年二月十日出發渡米され、米國各地の大學に於ける地理學研究の實情を視察し五月二十九日歸朝された。京都大學史學科では陳列館主催の歸朝歡迎會を催し、種々興味深い歸朝談をうかがつた。

同 一〇(昭二五年一月)

野間 清六

晉唐の觀音

小林太市郎

觀世音菩薩の展開

佐和 隆研

敦煌畫觀音圖資料

上野 昭夫

觀心寺如意輪

辻 晉堂

南都諸大寺僧侶の間取に關し

松本 榮一

建築史研究 二(昭二五年八月)

法隆寺東院七丈屋の復原

淺野 清

漢・六朝・飛鳥の格狭間

福山 敏男

越前永平寺の伽藍配置に就て

横山 秀哉

同 三(昭二六年一月)

周・漢・六朝・飛鳥の格狭間補遺

福山 敏男

ARTILIBUS ASIARUM voll. XIII 3 1950

Antiquities Examined from the Yin

Tombs outside Chang Te Fu in Honan

Province. Sueji Unehara.

An Indian Statuette from Pompeii.

Mirella Levi D'Ancona.

Notes Iraniennes IV. Le Trésor de Sa

Khez, les Origines de l'Art Méde et les

Bronzes du Lauriston.

R.Christman

Stalaja-Proide, Déesse indienne de la

petite Verole. Jeanine Auboyer et

M-Thérèse de

Mallmann.

執筆者紹介

小林行雄

京都大學文學部

直木孝次郎

大阪市立大學法文學部

岡崎精郎

大阪大學文學部

河村盛一

神戸外國語大學

平山敏治郎

大阪市立大學法文學部

東 品

京都大學文學部

次號預告(三四ノ四)

院內銀山の研究……………小葉川 淳

ドイツ帝國と文化闘争……………廣實源太郎

グプタ朝印度社會の一考察……………佐藤圭四郎

氣候馴化論の學史的省察……………和田 俊二

學界動向——中國封建社會への展望

池田 誠

書評・その他

前號目次(三四ノ一、二)

——機業特輯號——

津平野郷に於ける棉作の發展

……………高尾 一彦

ロンドン新冒險商人組合の設立

……………星田 輝夫

小松絹の發展

……………岩井 忠熊

古代中國の機械技術

……………太田 英藏

海外學界紹介——アルタイ・パズルイク

第二號墳の調査……………角田 文衛

機業關係著書論文目錄・書評・その他

動を開始して年末に及んでいる。左に例會の講師と演題とを記しておく。(敬稱略)

五月 挨拶

石濱純太郎

蒙古語文法書に及ぼせる西蔵語文法書の影響について
稻葉 正就

六月 外蒙におけるロシア文字使用について

松 源一

町と村

高橋 盛孝

七月 女真文字、金石資料とその解説について

長田 夏樹

十一月 浪華藝文會と共催

滿洲語の研究

石濱純太郎

朝鮮に關する研究

高橋 亨

遊牧社會と農耕社會との接觸について

岩村 忍

十二月 二三近著の紹介—エーベルハルト教授の近業—

内田 吟風

西蔵語尾辭 Pa, ba, ma などの問題

稻葉 正就

にらう

編輯後記

本誌の原稿が編輯係の手をはなれて印刷工場へまわつたのは本年二月初旬のことであつた。ところが印刷工場と發行所との關係が少し微妙になつていたので、初校が編輯係の手許に歸つて來たのは五月末、漸く出版の目やすがついたとたんに、京都を見舞つた大雨のため、こんどは印刷工場が水びたしとなりまたまた出版が延期されたのである。其の上編輯係の怠慢も加わつて、何とも申譯ない次第になつた。會員諸兄に深くおわび申上げる。

本誌には大體古代史關係のものをあつめてみたのであるが、いづれも夫々の分野に於いて必らず問題になるに相違ない力作を發表していただき編輯係として執筆者諸氏に御禮を申述べたい。

卷末につけた英文のレジメについて、會員諸兄からの御意見を承ることが出来れば幸甚である。一讀お判りの如く各英文レジメは本文の「梗概」の英譯を骨子としているものである。

尚、第四號以下は、事情も好轉したのでつ

ぎ／＼出版されると確信しております。御期待下さい。
藤澤 長治
星田 輝夫

昭和二十六年六月二十五日印刷
昭和二十六年七月一日發行
定價八〇圓

史 林 第三四卷三號

編集人 京都大學文學部内

代表者 史 學 研 究 會
織 田 武 雄

發行人 大阪市東區新町一ノ六

岸 本 貞 三 郎

印刷所 京都市右京區大森上刑部町一〇

大日本印刷株式會社
京都工場

發行所 大阪市東區南新町一ノ六

教育タイムズ社

出版部

振替大阪七一九二〇番

史學研究會々則 (昭和廿五年十一月改正)

第一條 本會は史學研究會と稱する。

第二條 本會の事務所を京都大學文學部陳列館内に置く。

第三條 本會は京都大學文學部史學科を中心として同好の士相集まり史學に關する研究をなすことを目的とする。

第四條 本會の事業は概ね在の通りである。

第五條 一、會合 二、研究調査及び見學 三、會誌(史林)等の發行

第六條 理事長理事及び監事は評議員の選出による。理事長は本會を

第七條 評議員は會員總會においてこれを選出し會務の諮問に應ずる

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

を監査する。

第八條 委員は理事長これを囑託し編輯、庶務、會計の實務を分掌する

第九條 役員は任期は二年とする。但し再任することが出来る。

第十條 本會の目的を贊し新に會員になるうとする者は入會申込をな

第十一條 理事會の承認を受けることを要する。

第十二條 會員は所定の會費を納入して、本會の會合に出席し研究、

第十三條 調査、見學その他の事業に参加し、會誌「史林」の配布を受

第十四條 毎月一回例會を開く。會場などはその度にこれを定める。

第十五條 毎年秋期に於て總會を開き、研究、調査、見學を行い及び

第十六條 會務の報告をする。

第十七條 本會の經費は會費、事業收入及び寄附金を以て支辨する。

第十八條 會費は月額七拾五圓とする。

第十九條 本會の變更は會員總會の決議によるものとする。但し會務

第二十條 執行に必要な細則及び物價變動に基く會費金額の變更は理事

第二十一條 會がこれを行う。

史學研究會役員

理事長 原 隨園

理事(編輯主任) 織田 武雄

同(庶務主任) 前川貞次郎

同(會計主任) 藤岡謙二郎

同 田村 實造

同 小葉田 淳

同 梅原 末治

同 那波 利貞

同 赤松 俊秀(國史)

評議員

井上 智勇(西洋史) 梅原 末治(考古學) 織田 武雄(地理) 小葉田 澄(國史) 小塚 茂樹(東洋史) 佐伯 富(東洋史) 柴田 實(東洋史) 田村 實造(東洋史) 中山 治一(西洋史) 那波 利貞(東洋史) 林屋辰三郎(國史)

原隨園(西洋史) 藤直 幹(國史) 藤岡謙二郎(地理) 前川貞次郎(西洋史) 三品 彰英(國史) 水野 清一(考古學) 宮崎 市定(東洋史) 村田數之亮(西洋史)

同(越智 武臣(西洋史) 同(門脇 禎二(國史) 同(里井彦七郎(東洋史) 同(高津 一朗(地理) 同(水野 清一(國史) 同(林 己奈夫(考古學) 同(藤澤 長治(考古學) 同(星田 輝夫(西洋史) 同(庶務) 岡部 健彦(西洋史) 同(會計) 横山 浩一(考古學)

一九五〇年九月六日第三種郵便物認可
一九五一年六月二十五日印刷
一九五一年七月一日發行
（每月一日一回發行）

史
林
第三十四卷
第三號

THE SHIRIN
or the
JOURNAL OF HISTORY

Vol. XXXIV No.3 1951

CONTENTS

- | | |
|---|---------------------|
| The Horse-Riding in Ancient Japan | <i>Y. Kobayashi</i> |
| “Loafers” in the Nara Period. | <i>K. Naoki</i> |
| Legends on the origin of the Turks | <i>S. Okazaki</i> |
| The Oldest Code in Russia. | <i>M. Kawamura</i> |
| Recent Studies of the Folklore | <i>T. Hirayama</i> |
| Recent Studies of the Ancient History of Japan. | <i>A. Higashi</i> |

Book Review

News from the Academic World

*Published
by*

THE SHIGAKU KENKYUKAI
(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan